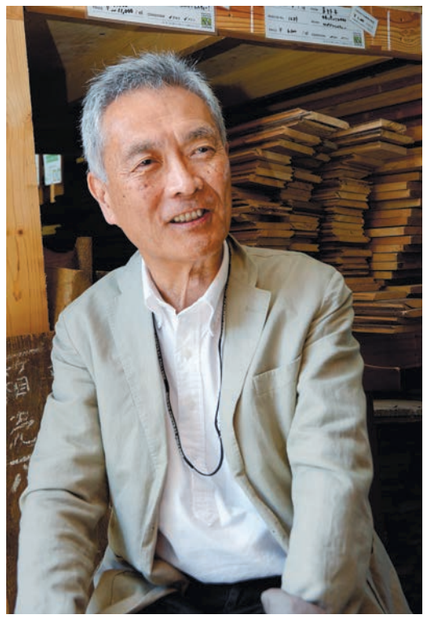
古材使い広がる表現 減る廃棄物

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

対談 小林光さん 東野唯史さん



小林光さん 73

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー（環境分野）

東野唯史さん 39

リビルディングセンタージャパン代表取締役
すわエリアリノベーション社代表

人生を懸けて扱う

小林 なぜ、古材販売を。

東野 デザインは社会問題を解決するためにあるという大学での学びが根底にあります。卒業後、展示会の出展ブースの設計会社に就職しました。展示会のために二日で建てて三日で壊す仕事です。スキルを磨くためと割り切って数をこなしましたが「これって環境負荷が高いよな」というギャップを抱えていましたね。独立後、友人から開業予定のゲストハウスのデザインの依頼を受け、ビルのリノベーションを手掛けました。

小林 古材を使ったデザインはゲストハウスが始まりですか。

東野 はい。当時はゲストハウスがブームでした。東京から地方に戻ってゲストハウスを開きたいという流れがあって、その流れに乗った友人から何件か依頼を受けました。地方に仮住まいし、解体現場を訪れて古材をいただき、建材に利用する造り方でした。かっこいいけど、安いというのが良さ。一方で、米国からわざわざ古材を輸入して建材に使う事業者もいました。日本では古材をどんどん捨てているのに。もどかしさを感じましたね。それで日本に古材屋があったらいいなというイメージを持ちました。2015年に米国オレゴン州のポートランドに行き、現地にあるリビルディングセンターを見ました。僕がイメージしていた古材屋の在り方にかなり近い形で運営されていました。ポートランドをモデルケースに。それが始まりです。

小林 イメージしていた古材屋の在り方とは。

東野 米国では古材を使えばごみが減らせるという価値に魅力を感じる人が多いように感じました。古民家的、インダストリアル的な表現方法以外にも古材で多様なデザインができる感覚をつかんだ時、人生を懸けて古材を扱う選択ができました。

環境負荷が小さく

小林 供給側として目覚め、可能性を実感したのですね。では、顧客のニーズが日本にあるのかという見極めはどうやって行いましたか。

東野 当初は店で売れるという期待はなく、自社で設計する店舗に使うつもりでした。ところが、「古材は釘を抜いたり、洗ったりするのが大変。買えるなら買いたい」という要望をいただくようになりました。仮に米国の古材に対する価値観が日本よりも進んでいるとします。そうであるなら、日本の古材に対する価値観もやがて米国に追いつくだろうし、ごみが減る事実は、気候変動やごみ問題が社会的な課題となったときに優位に働くと考えました。

小林 その目論見からすると、米国と日本の価値観の差は縮まったのでしょうか。

東野 縮まったとは思いますが、米国は自分自身で自分だけのオリジナル品を作るDIYの文化が進んでいて、その点はまだまだですね。

小林 顧客にはどのような点をアピールしていますか。

東野 以前は古材を使うと、かっこいい表現ができることを強めに押し出していましたが、最近は環境への負荷が小さいという古材の特性を強めに提案しています。コロナ禍以降、環境意識の高まりを感じています。あるビーガンフードの出店者の思いは、動物愛護的な感情よりも畜産が環境に与える負荷の大きさに気がかりという点にありました。だから、店内は古材を使う。そうした点に価値を置くニーズが高まりつつあります。

コスト面では同じ

小林 手掛ける建物では古材を使うだけでなく断熱性能も高めていますね。リサイクルだけでも立派ですが、断熱性能に意識を向けた理由は。

東野 リノベーションとは建物をまるごと「レスキュー」(リビセンでは、取り壊され、廃棄される運命にある古民家などから古材を引き取り、他の用途に生かす活動を「レスキュー」と呼ぶ)できることにつながります。しかし、そうしてできた家や店舗が「夏暑く、冬寒いのでエネルギーをたくさん使います」では言っていることとやっていることがめちゃくちゃです。

小林 リサイクルしたけど、使うエネルギーは増えましたということになりますね。

東野 「ライフサイクルのエネルギーはどうなの」と問われ「リノベは高いです」では通用しません。リノベでも断熱をちゃんとすれば、エネルギー負荷を下げ、新築以上の快適性能が確保できます。

小林 新築とリノベ、コスト面ではどのくらいの差がありますか。

東野 同じくらいだと思います。こんな話がありました。孫と一緒に三世代で住みたいというお客さんなのですが、先祖代々の家にずっと住んできましたので、冬場の家の中の寒さを実感しています。愛着はあるけどこんな寒い家に孫は住ませられない。だから、壊してハウスメーカーで建てるのだと。ハウスメーカーの家を建てる資金があるなら、その資金で断熱性を高め、今の家に孫を迎え入れるというのは選択肢の一つとしてあっていいと思います。「壊して新築した方が簡単」とか「リノベーションは新築以上にお金が掛かる」などと伝えて建て替えを促す業者は少なくありません。でも、それは家主の選択肢を狭めることになるのではないでしょうか。

断熱で快適性能を確保

「レスキュー」後、建材として使用しやすいよう仕分けした古材を並べる店内。案内する東野社長(左)と小林さん＝8月7日、諏訪市のリビルディングセンタージャパン

リノベして物件に

小林 今後の目標は。

東野 エリアイノベーションを進めたいですね。第1弾として上諏訪駅近くにある2階建ての四軒長屋を改修して商業複合施設にする計画を進めています。リノベで店を出したいという人がいたとして、建物がぼろぼろの状態からだと、なかなか手が出せないのではないでしょうか。そこでリノベ済みの物件にテナントとして入居して商売ができる場所を提案したらどうかと考えました。この施設をかつての諏訪の街の姿に由来し、港と路地を意味する英語を重ね合わせて「ポータリー」というネーミングにしました。

小林 今後、必要となってくる社会システムについてどう考えますか。

東野 古材は環境負荷が小さいはずですが、適切な査定ができていません。廃棄物を焼却したときの熱エネルギーを再利用する「サーマルリサイクル」と新たな製品の原料として再利用する「マテリアルリサイクル」がひとまとめで「リサイクル」となっているためです。木材のごみを焼却処分した時もサーマルリサイクルだから「当社はリサイクル率は高い」と大手を振って言えてしまうのです。二つのリサイクル方法を分けて数値化すれば「マテリアルリサイクル率を上げていこう」という機運が生まれやすいのではと考えています。

小林 ほかには。

東野 県産材や間伐材を使った場合の補助金って全国にありますよね。でも見方を変えれば、古材だって県内から出ていれば、県内で調達した県産材。古材県産材に補助金を出すことはできないのでしょうか。今の枠組みではできないらしいのですが。

持続可能な視点を

小林 現行の枠組みとは別に新たな制度としてつくればいいのです。以前、小池百合子都知事に提案しましたが、木材としての炭素蓄積量を出してみたら面白いのではないかと思います。

東野 都道府県単位で取り組むのはいいですね。長野県は脱炭素の社会づくりで先進的な県という評価がありますから。すでに人や環境について考慮した建物を評価する国際認証制度「LEED（リード）認証」があります。持続可能な建築資材の利用や廃棄物の削減などの視点を取り入れて制度設計してみたらいいのではないかと思いますね。

エリア丸ごとのリノベーションを進めたい